

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

* フランコ・バッティートの音楽 *

深草 真由子

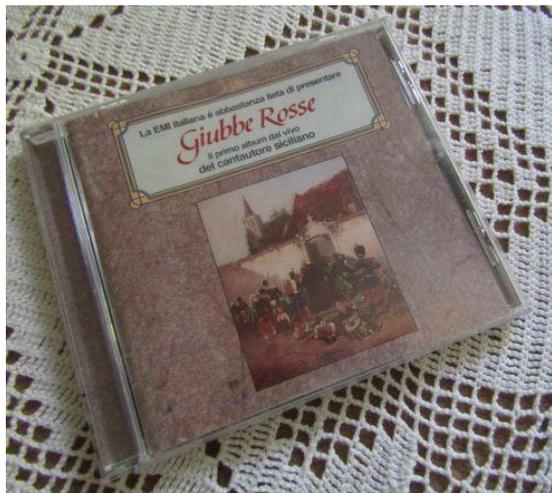
イタリアのポップ音楽のことなどほとんどなにも知らなかったころ、誕生日に友人が一枚の CD をプレゼントしてくれた。「結局、このアルバムが一番 romantico なんだよね」と言って渡してくれたそれは、茶色とも薄紫ともいえない色をした、いかにも地味なジャケットだった。地方都市のお祭りの光景だと思われるブラスバンドを描いた風俗画のようなものがプリントされており、その上に「イタリアの EMI がよるこんで紹介するのはシチリアの…」と書いてある。EMI といったらクラシックのレーベル？じゃ、これはシチリアの伝統音楽の CD かな？それがわたしが最初に考えたことだった。一体そのなにがロマンチックなのか、たずねもせずに。

ところが CD をセットして聞こえてきたのは、ピアノが奏でる洗練されたメロディーだった。フォークロアの雰囲気はない。しばらくするとピアノにかさなって、低音のドラムがドン・ドン・ドンと三拍子をうちはじめ、ヴォーカルが歌いはじめる。Quante lucertole attraversano la strada (なんと多くのトカゲが道を横切ることか)...

トカゲが歌に登場するなんて、ちょっと変わってるかも…。でも、トカゲを意味する単語の複数形“lucertole”の L の音があまりにやさしく甘く、耳に心地いいものだから、生きものへの愛が歌に込められているように感じた。

これがわたしがはじめて聴いたフランコ・バッテ

ィアートの音楽だった。「南にかえる～自分の運命にしたがうために～わたしの中に存在する～わたしの歩みの～次の道のり」。実際にはトカゲの歌ではなくて、トカゲを愛でることができるような心持ちを大切に生きる方を歌ったものだ。



【Giubbe rosse】

バッティアートは歌手として成功したあと、ミラノから故郷のシチリアにもどってきた。エトナ山の麓に位置する小さな町である。「灼熱の火山が Giubbe rosse の力を遠ざけた」と歌詞にもあるように、曲のタイトルは Giubbe rosse。リソルジメントの時代に活躍した、赤い軍服のガリバルディ部隊のことだ。Giubbe rosse はアルバム全体のタ

イトルにもなっている。

フランコ・バッティアートは 1945 年、戦争が終わるすこし前にシチリアのカターニャ近郊で生まれた。19 歳でミラノに移り、当時流行していたキャバレーの前座でシチリアのカンツォーネを歌っていたときに、その才能を見いだされた。60 年代後半に大手レコード会社と契約をむすび、いくつか曲を出した。たが、自分の性分にあわないラブソングをビジネスのために歌わなければならないことに悩み、精神的に追いつめられてしまったようだ。

この苦しい時期に、自分を解放する方法として瞑想に出会い、スーフィズムをはじめとする世界の神秘哲学に近づくことになった。これはバッティアートを無類のアーティストたらしめる要素の一つであろうと思う。

実験音楽やニューウェーブなどをいろいろと模索したのち、1981 年に出したアルバム *La voce del padrone* が大ヒット。結局ポップという、もともと彼が距離をおこうとしたジャンルに戻ってきたわけだが、それまで誰も耳にしたことがないような独特の楽曲を生み出し、商業的な成功も手に入れたのである。

その後も長く歌手活動をつづけながら、ほかのアーティストに曲を提供したり、オペラの作曲や映画の制作、絵画などを手がけたりもした。政治の世界に足を踏み入れて、シチリアの文化政策を担ったこともある。2015 年、ライブの最中にステージから転落してしまい、けがを負った。いったんは復帰するものの、万全とはいえないコンディションがつづき、2021 年に 76 歳で亡くなった。

バッティアートを一度でも生で聴くことができたのは、ほんとうに幸運なことだった。街でコンサートのポスターをたまたま見かけて、せっかくだからと、思い切ってチケットを買ったのである。

わたしはそれまでメジャーな歌手のコンサートに行ったことがなく、みんなが歌って踊って盛りあがっているのに自分もついていけるのだろうかとちょっと不安だったのだが(別についていく必要はまったくないのだけれど)、バッティアートのライブは予想していたものとはぜんぜん違っていた。一部の曲をのぞき、彼はずっといすに腰かけたまま、

身ぶり手ぶりもごく自然な、最小限のものだけで歌っていたので、コンサートというよりも、語りものかなにかのステージを観劇しているようであった。リズムにあわせて観客が手拍子を打ったりすることもほとんどなかったと記憶しているが、音楽をそこにいるみんなで共有している実感があつた。そのとき売り出し中だったアルバムの曲や昔のヒット曲を聴き、夢のような時間を過ごすことができた。



【フランコ・バッティアート】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Franco_Battiato

バッティアートの曲のなかでもっとも楽しくて歌いやすいのは *Cuccurucucù* だろうか。「クックルッククウ〜パローマア〜」というサビの部分は、ハト(スペイン語で *paloma*)の鳴き声をあらわしたオノマトペである。ボブ・ディランやビートルズなどの曲からの引用がちりばめられていて、バッティアートが愛したであろうアーティストへのオマージュにもなっている。そのほかノリが良いものとしては *Bandiera bianca*、*Centro di gravità permanente*、*L'era del cinghiale bianco*、*Up Patriots to Arms*、*Voglio vederti danzare* がある。

ゆっくり聞かせるタイプのものなかでダントツの人気を誇るのは *La cura*。シチリアの哲学者マンリオ・ズガランブロとのコラボレーションから生

まれた傑作である。Gli uccelli や L'animale、 Tutto l'universo obbedisce all'amore、 La realtà non esiste など、メロディーといい詩の内容といいすばらしい作品で、聴くたびに感動させられる。わたしの最近のお気に入りには Prospettiva Nevski。レーニン時代のソ連の日常の光景を描いたもので、バッティアートの声とメロディーがもっともマッチしている曲の一つだと思う。

Povera patria も名曲である。30年前の作品でありながら、歌詞の内容が(残念ながら)まったく古くなく、今でもテレビ番組などでときどき歌われる。

Povera patria
Schiacciata dagli abusi del potere
Di gente infame, che non sa cos'è il pudore
Si credono potenti e gli va bene
quello che fanno

E tutto gli appartiene
Tra i governanti
Quanti perfetti e inutili buffoni
Questo paese devastato dal dolore
Ma non vi danno un po' di dispiacere
Quei corpi in terra senza più calore?
Non cambierà, non cambierà
No cambierà, forse cambierà

あわれな祖国よ
恥を知らぬ、心の卑しい者たちの
権力の乱用に押しつぶされている
自分に力があると信じて、好き勝手に振る舞い
なにもかもを手にしている
政治家たちのあいだに
まったく無用な道化がなんと大勢いることか
この国は苦痛に苛まれているというのに
地面に横たわるあの冷たい体を見て
あなたたちはすこしも胸が痛まない?
変わらない、けっして変わらない
いや、変わる、きっと変わるだろう

マフィア犯罪の犠牲者か、地中海で溺死した難民たちか。この曲を聞いて、国に見放されたかの

ようにして亡くなった者たちのことを頭に浮かべない人はいないだろう。ライブでは政治家(の一部)を道化と呼ぶところで大きな拍手がわきあがる。社会への抗議を含みながらも、つよく叫ぶのではなく、やさしく説くように歌われる曲だ。フランコ・バッティアートがマエストロと呼ばれて尊敬されるのは、アーティストとして圧倒的な才能を備えていたからだけでなく、現実がどうしようもなく絶望的であっても、それに抵抗するための静かなエネルギーに音楽がなりえることを、身をもって示しているからだろう。



【フランコ・バッティアート】

出典:https://it.wikipedia.org/wiki/Franco_Battiato

<フランコ・バッティアート公式チャンネル>

https://www.youtube.com/channel/UCBegBczbSAt6E1eyyKBx_Xw

(元当館スタッフ)

* イタリアで交通事故 *

杉 栄子

2002年の6月末から約1ヶ月間、イタリア南部、ブーツの踵部分にあるレッツェという町に滞在した。レッツェ大学(現在はサレント大学)の夏期イタリア語講座に参加するためである。それまでもナポリやポンペイ、アルベロベッロといった観光地を旅行で訪れたことはあったが、1ヶ月という長い期間、そして夏という季節をイタリア南部で過ごすのは初めてだった。



【レッツェとオストゥーニの位置図】

図版参照: google map

イタリアに到着後、まずは以前留学していたポーロニャで懐かしい友人たちと再会した。その後、夜行列車でレッツェへ。着いたのはお昼近かったと思うが、着いてすぐに感じたのは、北部とは異なる種類の暑さだった。空気が熱くて重い。そして非常に乾燥している。洗濯物を干せば1時間でカラカラに乾くほどだ。私は砂漠に行ったことはないが、こんな感じの暑さではないだろうかと思った。滞在中に知ったことだが、風の吹く向きによって

気温が変わり、過ごしやすさに大きな差が出るということだった。イタリアから見て北西、ヨーロッパ大陸からの風(マエストラーレ)が吹く日は、夏であっても快適な暑さで過ごしやすいのだが、それに対して南東、北アフリカからの風(シロッコ)が吹くと、まさに熱波と呼べるような熱い空気の塊がやってくるのだ。だから地元の人たちの日常会話には「明日はシロッコだから暑くなるよ」とか、「暑いね」「シロッコだからね」といった具合でシロッコが登場する。おそらくレッツェに到着した日は、シロッコが吹いていたのだと思う。重苦しい暑さのなか、中央駅から宿泊先までスーツケースを転がしながら歩いて行った。

荷物を置いた私は街の様子を見に外へ出たが、人っ子ひとり歩いていなかった。昼休みの時間帯で多くのお店が閉まっていることは予想していたが、人も歩いていないとは少し驚いた。もちろん暑さが理由で、皆、屋内でゆっくり過ごしているらしかった。昼休みも長く、お店が営業を再開するのは17時とか18時。そして陽が落ちて涼しくなってくると、今までどこにいたのだろうかと思うほど多くの人間が通りをそぞろ歩いていて、同じ街とは思えないほどだった。

それほど暑いのに、宿泊先の学生寮にも、イタリア語講座が行われる教室にも、エアコンが設置されていなかった。日本と比べて湿度は低かったものの、特にシロッコが吹く日は、あまりの暑さで授業の内容は全くとっていいほど頭に入らなかった。語学講座で覚えていることといえば、初日のレベル分けテストで先生から「あなたは接続法の問題を全部間違えた」と言われたことくらいだ。どう間違えたのか説明してくれたのかもしれないし、その後振り分けられたクラスで勉強したのかもしれないが、恥ずかしながら全く記憶にない。というのも、この滞在中、語学学校よりも強烈に記憶に残る出来事があったからである。そしてそれに関わる幾つかのイタリア語は、その後使う機会が無かったにも関わらず、不思議なことに今も忘れないで覚えている。その出来事というのがタイトルにある交通事故だ。

語学学校のプログラムでよくあるのが、午前中にイタリア語講座を行い、昼休みをはさんで、午後文化的な課外活動をするというものだ。それ

は料理教室だったり、映画鑑賞だったり、郷土の工芸品作成や、近郊の街訪問など、バラエティに富んでいる。

その日はアドリア海に近いオストゥーニへの遠足だった。人口約3万1千人の小さな街で、白く塗られた壁と青い空のコントラストが非常に美しく、観光客に人気がある。私たち語学講座の生徒は大型バスに乗ってオストゥーニへ向かった。到着後、バスを降りてから市街地へ、交通量の多い坂道を歩いて登ったと思う。大勢で歩いていた私たちにとって歩道はとて狭く、私は不注意にも、つい左足を歩道から車道へ降ろしてしまった。右足は歩道の上に残しつつ、左足だけが車道という体勢だ。車が走っていることはわかっていたが、交通量が多かったためスピードは出ていなかったし、まさか歩道のそんな近くを通ってくるとは思っていなかった。しかし、タイミング悪く、私が足を降ろしたその瞬間、左足の上を車がゆっくりと通っていた。

不思議なことに痛みは感じず、後ろを歩いていた女性が悲鳴を上げたのを聞いて、あ、大変なことになったかもしれないと思った。そこからはちょっとした混乱状態になった。誰かが私を歩道に座らせ、私の周りに人だかりが出来た。現地のイタリア人らしき人たちが一斉に喋るものだから、何を言っているのかわからなかった。私が返事をしないので、暑さによる熱中症を心配したのか、頭から水をかけろと言い出した人がいた。それは聞き取れたので、いらないと返した。足は痛くなかったが、なんだか気分が悪く、この状況にただ茫然としていた。それからどういう経緯を経たのか覚えていないが、私の足をひいた車の運転手が、私を病院へ連れて行くことになり、遠足を引率するイタリア人ガイド、講座に参加していた別の日本人女性と一緒に救急病院へ行った。

到着すると車椅子に乗せられ、待合室へ運ばれた。そこで待っている間、一緒に来てくれた日本人女性が、日本語で色々と話しかけてくれた。体調を気遣ってくれつつ、事故とは関係がない雑談をしたおかげで、私は徐々に落ち着いたと思う。

診察室にはイタリア人ガイドが付いてきてくれ、現地の方言で話す医者言葉を平易なイタリア

語に言い換えてくれた。医者は左足を色々な方向に動かし、骨は折れていないと思うが念のためにレントゲンをとということになった。



【オストゥーニ全景】

出典:<https://it.wikipedia.org/wiki/Ostuni>

レントゲン室へは別の看護師が連れていってくれたのだが、車椅子をレントゲン室の扉へ向かってスピードを落とさず押しながら、「あなた、後ろから衝突されたんですって？このまま扉にぶつかったら正面衝突っていうのよ～」と言った。あまりに明るい口調だったものだから、私は一瞬何を言われたのかわからなかった。交通事故に遭ったばかりの人にかかる言葉としては、適切ないように思えなかったからだ。イタリア語を学びに来ている外国人に新しい単語を教えようとしたのか、笑わせるための冗談だったのか、それとも、イタリア語がわからないと思ってからかわれたのか。彼女の意図は今でも謎である。ちなみにレントゲン室の扉は、奥へ向かって開く自動ドアで、ぶつかることなく入室できた。

さてレントゲンの結果でも骨折はしていないことが確認された。打撲で腫れるだろうからということで、左足の膝下から足先まで、何か薬が塗られている包帯がぐるぐると巻き付けられた。病院の後、遠足を続けている本体グループに合流しなければならなかったのだが、くたんの運転手は連絡先を残していなくなっていた。どうするのかと思っていたら、ガイドが道端に立ち、右腕を肩の高さに水平にあげ親指を立てた。ヒッチハイクをしようというのだ。止まってくれる車なんかあるのかなと思ったが、ものの数分で乗せてくれる車が見つかり、私たちは無事に皆と合流できた。

その日は、学生寮ではなく、病院に同行してくれた日本人のアパートに泊まらせてもらった。医

者の見立て通り、夜になる頃には足は腫れ熱をもち、ひどい痛みを襲われた。その痛みも2、3日でましになったので、講座に再び通い、街をのんびり散歩して過ごした。イタリアの救急病院はなんと無料なので診察料は発生しなかったが、加入していた海外傷害保険会社に電話をかけ、事情を説明しアドバイスを求めた。痛み止めや湿布などの薬代も請求出来ること、でもそのためには診断書が必要なことなど教えてもらった。

その頃、ポローニャの友人が夏のバカンスでレッツェの近くに滞在しており、たまたま電話をくれた。事故に遭ったこと、たいした怪我ではないこと、でも診断書が欲しいことなどを話すと、レッツェの知り合いを通じて病院を調べ、連れていってくれた。おかげで改めて診断をもらい、無事に診断書をもらうことが出来た。さらに、逃げてしまった運転手のことを相談すれば、と弁護士まで紹介してくれた。それまで弁護士に相談などしたことがなかったので緊張したが、とても親切な人だった。直接運転手と話してくれ、運転手は自分に非があると思っていないこと、だから治療費など払う気はないことがわかった。また、私が軽傷であることから、仮に運転手を訴えたとしても、得られる賠償金より弁護士費用の方が高つくとの結論だった。私もそこまでする気はなかったので、お礼を言って相談料を尋ねたら、いらないとされた。

当時のレッツェには、それほどアジア人がいなかったと記憶している。街中を歩いていてもほとんど見かけなかったのだから、日本人の私は珍しかったのだろう。それに2002年7月といえば、日韓W杯でイタリアが韓国に敗れた後だった。だから、街を歩けば韓国人！と声をかけられたし、その度に日本人だよ、日本も負けたよと繰り返した。

事故に遭ってからは、包帯を巻いた左足を引きずって歩くものだから、余計に目立った。レッツェの人たちは好奇心を隠さず、何があったのか質問してくるので、何度も事故の説明をした。わざわざ車を停めて、行きたい所まで送ってあげると申し出てくれる人も数人いたが、実際に乗せてもらうことはしなかった。そんなの申し訳ないという気持ちと、親切心からの申し出なのか、ナンパ目的なのか、当時の私には判断がつかなかったからだ。いずれにせよ、知らない人に話しかける際のハ

ードルの低さというか、軽やかさは、人見知りの私には羨ましく映った。

私をもっと慎重に行動するべきだったことは言うまでもないが、対応してくれる現地のガイドがいたこと、他にも日本人が参加していたこと、ポローニャの友人がたまたま近くに来ていたことなど、幸運に恵まれたケースだったと思う。車に轢かれたのに打撲で済んだことも不幸中の幸いだったし、もし骨折していたらと想像すると恐ろしくなる。

これでイタリアに行くことが怖くなった、、なんてことは全くなく、その後は一層、車に気をつけながら、たまのイタリア滞在を楽しんでいる。



【レッツェの守護聖人、聖オロンツォの像】

出典: <https://it.wikipedia.org/wiki/Lecce>

(当館語学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>